



東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): 東アジアの経験に立脚した開発学の構築

研究課題(英文): Constructing Development Studies based on Asian Experience

申請者名・所属先: 佐藤仁・東京大学東洋文化研究所

海外招聘者名: Soyeun Kim(韓国・西江大学)

1. 研究の目的

日本人を含むアジアの人々の手による、アジアの開発経験に立脚した「開発学」を構想し、これを英語で発信していくことによって、国際開発分野の知識の偏りを是正し、地域の実情を反映した実践知を打ち立てる。特に、日本、中国、韓国における開発学の系譜を相互に比較することによって「アジア的な開発学」の特徴をあぶりだすことを本研究の目的とする。

2. 研究開始当初の背景

主に発展途上国の開発の在り方や南北問題を議論の対象とする「開発学 (development studies)」は欧米の大学で発展してきた。国連機関などに勤務を希望し、国際開発を専門として志す日本人の大部分も、欧米留学をすることが半ば前提となっている。しかし、そこで教授されているのは欧米諸国の植民地における開発経験に根差した「開発学」であり、日本やアジアの経験はほとんど反映されていない。だが、この作業をするにあたって、そもそも日本やアジアの「経験」とは何か、という大問題がある。そこで、日本の援助に造詣が深く、韓国の援助をも熟知したキム・ソヤン博士を日本に招聘し、東洋文化研究所の特任研究員として中国の援助を研究している汪牧云氏とも共同しながら「アジアの開発学」の基礎となる「東アジアの経験」の整理を行うことを思いついた。

3. 研究の方法

中国、韓国、東南アジア(主にタイとベトナム、カンボジア、ラオス)の研究者らと協働し、それぞれの国で開発がどう教えられているのかをサーベイしたのに、「アジアの開発学」に含まれるべき経験の洗い出しと体系化を行う。日本であれば、近代化の過程における西欧文明との邂逅と選択的な技術・制度の導入過程、高度経済成長期の公害問題と市民社会、そして現代の過疎と少子化などが焦点となる。これらの経験を欧米の開発学知と違和感のない形で提示していかななくてはならない。

研究のプロセスとしては、まず中国の開発学の系譜を研究している筆者の博士課程院生、そして韓国の開発学に詳しい韓国・西江大学のキム・ソヤン准教授と密に協働し、東アジアの開発学について共同論文の執筆を行った。この論文では、特に 3 つの国の開発学が政府の政策とどのような距離感で学問形成を行っているのかを系譜的に比較する方法をとった。



4. 研究成果

一連の研究の結果、日本、韓国、中国はそれぞれの開発学の個性を持ちながらも、互いに影響を与えながら発展してきたことがわかった。今後は、これからの知的枠組みが現場の開発実践にどのように翻訳されているのかを解明していくことである。なお、具体的な成果としては国際開発分野の専門誌である *Progress in Development Studies* に投稿され、無事に accept された共著論文一篇と、研究の過程で焦点になった開発概念の「翻訳(不)可能性」の問題について論じた共編著 *Semantics of Development* (Springer Nature) 一冊(出版社に提出済み)がある。コロナ禍で行われた研究ではあったが、十分な成果が得られたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔図書〕

2023 年度刊行予定

Humanities Center Booklet シリーズ <https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/booklet/>

- 『<東アジアの「開発」と「発展」—日・中・韓の開発研究を比較する>』(仮)
- 『<日本型援助理念(Ideas)を問い直す>』(仮)

2023 年 4 月 1 日に査読原稿提出完了

The Semantics of Development: Exploring 'Untranslatable' Ideas through Japan – co-edited by Jin Sato and Soyeun Kim (The University of Tokyo Studies on Asia monograph series published by the University of Tokyo Institute of Advanced Studies on Asia, in partnership with Springer/Nature)

〔雑誌論文〕

- ① Soyeun Kim, Muyun Wang, and Jin Sato (forthcoming) Development Knowledge in the Making: The Case of Japan, South Korea and China, *Progress in Development Studies* (accepted and forthcoming)
- ② Soyeun Kim (2023) Making a Case for Postcolonial Thinking in International Development Studies: Towards a More Critical and Self-reflexive Field, *国際開発研究* 31 巻 3 号 p. 83-103.
<https://doi.org/10.32204/jids.31.3.83>

〔学会発表〕

① Humanities Center オープンセミナー

- 53 回: 東アジアの「開発」と「発展」—日・中・韓の開発研究を比較する— 2022 年 2 月 11 日
— <https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/open-seminar/2022/53-east-asia-develop/>
- 78 回: 日本型援助理念(Ideas)を問い直す — 2022 年 8 月 19 日 <https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/open-seminar/2022/78-japan-oda-ideas/>

② 国際開発学会 第 33 回・全国大会 — 明治大学

2022 年 12 月 4 日(日) ラウンドテーブル「日本型援助理念と政策を問い直す」

発表者:

- Yu Maemura (東京大学)「自助努力支援」
- 佐藤仁(東京大学)「要請主義」
- Kim Soyeun (韓国・西江大学)「開発輸入」

討論者: 志賀裕朗(横浜国立大学)



6. 招聘フェロー(海外招聘者)からのコメント

まずは、招聘していただいた東文研の佐藤仁教授およびヒューマニティーズセンターへ心から感謝申し上げます。コロナの中、渡日できず苦勞しましたが、2022年6月に入国し、共同で準備・執筆していた論文やプロジェクトなどの内容をより深めることが出来ました。東大、東文研また日本の開発研究関連の図書館で資料を読み・収集し、研究トピックのキーパーソンにインタビュー調査したり、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。Humanities Center オープンセミナーやブックレット出版の準備過程も研究内容をより明確にできる機会となりました。Humanities Center の祝世潔先生や和田真生先生と交わした対話と議論からも刺激を頂きました。今回の招聘フェローシップのお陰で「東アジアの経験に立脚した開発学の構築」という研究課題に励むことが出来ました。成果としては学会での発表だけでなく、単独論文1本及び共著論文1本の出版、そして佐藤仁教授と共編するEdited volumeの準備があげられますが、どれも大変有意義な研究であり心からHumanities Centerのご支援に感謝申し上げます。